大野城市歴史資料展示室　解説シート　考古No.34

# 中寺尾遺跡

大野城市教育委員会

中寺尾遺跡は大野城市大池1丁目にある遺跡です。かつては大字中、字寺尾と言っていた場所にあることから中寺尾遺跡と命名された遺跡です。今まで福岡県や大野城市の教育委員会の手によって、昭和44年（1969）、51年（1975）、58年（1983）の3ヵ年で4回の発掘調査が行われています。

これらの発掘調査によって、遺跡は主に弥生時代の集落や墓地の跡であることが明らかになりました。住居跡は一部古墳時代のものも含みますが38軒、墓地では土坑墓87基、甕棺墓59基、箱式石棺墓1基、石蓋土坑墓2基、そして平安時代の土坑墓1基が見つかりました。また、遺物の中で注目されるのは小壺と磨かれた石のやじり（磨製石鏃）です。

右の写真は昭和51年の２次調査の時に見つかった弥生時代の住居跡です。だいたい四角く掘りくぼめ、柱を４本立てて屋根を葺きました。縦に穴を掘ることから、竪穴住居跡と呼びます。重なっているのは建て替えたり、時期を違えて建てているからです。

右の写真は墓地の様子です。長方形に掘った穴に副葬品以外に何もないのが土坑墓です。掘った穴に大きな土器が見えるのが甕棺墓です。2000年以上たっていますので、土の圧力でつぶれています。この遺跡ではこれらのお墓に小さな壷を副葬しているのが特徴です。

中寺尾遺跡からは朝鮮半島からもたらされたと考えられる磨製石鏃（右下の写真）が見つかっていますが、青銅器などのめだつ遺物は出土していません。普通の一般集落だったのでしょう。この遺跡で注目されるのはお墓の移り変わり方です。弥生時代の前期前半には土坑墓、後半には甕棺墓が出現し、中期には甕棺墓が一般化します。しかもこれらは場所を変えながら変わっています。これらのお墓はいくつかのまとまりがあるように見えることから、吉野ヶ里遺跡の墳丘墓のようなまとまりを考える研究者もいます。このように、この遺跡は市にとっても考古学の研究にとっても、重要な遺跡と言うことができます。

遺跡の一部は保存されて公園になっています。

(2004.3.31)